

カーソンと海を愛した詩人たち

浅井 千晶

キーワード：レイチェル・カーソン、海、想像力

はじめに

レイチェル・カーソン(Rachel Carson, 1907~64)の名は、農薬や化学物質による環境汚染と破壊の実態を世に先駆けて告発し、世界中で農薬の使用を制限する法律の制定を促すと同時に地球環境への人々の発想を変える契機となった『沈黙の春』(Silent Spring, 1962年)で知られている。だが第一に、カーソンは海洋生物学者であり、『沈黙の春』出版までは海について科学的に語るベストセラー作家として知られていた。

レイチェル・カーソンは、ペンシルヴァニア州ピッツバーグ近郊で過ごした少女時代を後年振り返って「私が、野外のことや、自然界のすべてに興味を抱かなかったことは、かつて一度もありません」と語る、自然と生き物が大好きな少女だった¹。一方、文章を書くことも好きで、十歳のときには子ども向け雑誌として有名な『セント・ニコラス・マガジン』に「雲の中の戦い」という作文が掲載されたほどだった。カーソンはペンシルヴァニア女子大学(現チャタム・カレッジ)入学時には作家を志し、英文学を専攻する。しかし必修科目で受講した生物学に魅了され、動物学に専攻を変えて卒業し、続いてジョーンズ・ホプキンス大学で動物学の修士号を取得した。カーソンの五つの著作中、最初に出版された『潮風の下で』(Under the Sea Wind, 1941年)は商務省漁業局の放送番組のために執筆された文章を発展させたもので、ドラマの登場人物のように海にかかわりをもつ生物に固有名詞が与えられ、生氣あふれる存在として描かれている。とはいえカーソンは、自然・無生物などに人間の特性や感情を賦与する pathetic fallacy (感傷的誤謬) は注意深く避けた。次に出版された『われらをめぐる海』(The Sea Around Us, 1951年)はどのようにして海ができたかという海の起源から、潮の流れと生命、人間と海とのかかわりまで、海の不思議と魅力について語る著作であり、大ベストセラーとなった。『われらをめぐる海』の各章冒頭には聖書や文学作品からの引用があり、作品の抒情性を高めている。海に関する三番目の作品である『海辺』(The Edge of the Sea, 1955年)では、海辺のさまざまな環境と生物の生態が詳細に描写されている。カーソンの言葉によれば、「海辺」は「ほとんど誰でも行ける場所」であり、「陸地の特徴と海の特徴をあわせもつ過渡的な地域」であり、「進化の劇的な過程を実際に観察できる」、特に興味ある地帯なのである²。

カーソンの最後の著作『センス・オブ・ワンダー』(The Sense of Wonder, 1965年)はカーソンが姪の息子 Roger とメイン州の別荘付近の海辺や森で過ごした経験に基づいたエッセイで、1956年に雑誌『ウーマンズ・ホーム・コンパニオン』に掲載され、カーソンの死後、友人たちによって単行本として出版された。『沈黙の春』が環境破壊の実態を克明に描くことで現実認識を促すのに対し、『センス・オブ・ワンダー』は五感を使うことの大切さを説き、自然や生命に対する畏敬の念を喚起しようとする。カーソンの著作では、『センス・オブ・ワンダー』のように生命の営みを愛でる自然礼賛を主とする作品においても現状への警告が文面に潜み、逆に農薬の惨禍を告発し現状を批判する『沈黙の春』においても随所に自然の美しさが描写され、この二つの作品は相補的であるとして過言ではないだろう。カーソンは、『センス・オブ・ワンダー』の一節で、「センス・オブ・ワンダー＝神秘さや

1 Brooks, Paul. *Rachel Carson: The Writer at Work*, p.18.

2 Brooks, *Rachel Carson: The Writer at Work*, p.154.

3 Carson, Rachel. *The Sense of Wonder*, p.54.

不思議さに目をみはる感性」は周囲の害毒に対する解毒剤であると述べている³。ローレンス・ビューエル (Lawrence Buell) は、『沈黙の春』が公共政策に広大で重要な影響を与えた数少ない環境に関する書物となった理由は…(中略)…これが『センス・オブ・ワンダー』を書くことができる作家によるものだからである。逆に、自然の美しさの賞賛がカーソンの唯一の関心であったとすれば、彼女の声は歴史の中に消えてしまっただろう」と論じている⁴。カーソンの著作は科学的に正確であると同時に、文章には美しいリズムがあり、対象を生き生きと描写する能力に秀でていた。

さて、レイチェル・カーソンが生まれ育ったペンシルヴァニア州西部は海から遠く離れた内陸部で、大学卒業後にマサチューセッツ州のウッズホール海洋研究所の研修に参加するまで海を見たことがなかったにもかかわらず、カーソンは海との絆を幼少時から強く感じていた。この論考では、カーソンが少女時代・学生時代に愛読した海をモチーフにした詩がカーソンに与えた影響を吟味し、その後「センス・オブ・ワンダー」と想像力の大切さについて考察していく。

1. 海に魅せられて

レイチェル・カーソンは、『われらをめぐる海』がベストセラーになり、ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン紙主催の昼食会に招かれた際、「私はこの目ではじめて海を見る何年も前から、海のことを考え、夢に見たり、どんな場所か心に思い描いたりしていました。スウィンバーンやメイスフィールドなど、偉大な海の詩人が大好きでした」と語っている⁵。

太古から人類にとって海は大きな存在であり、聖書の「創世記」では海は原初的な混沌とされ、ギリシア神話では海の神が活躍する。時代が下り、海の雄大さや美しさ、崇高さが文学のなかで積極的に称揚されるようになったのは十九世紀初頭のロマン派文学に拠る部分も大きい。時代の規範や理性を重視した十八世紀文学とは異なり、ロマン派文学は、まず<個>のもつ思想・感情と経験を重視した。第二に、無限なるものへの憧憬がみられた。海は無限なるものの象徴の一つであり、イギリス・ロマン派やヴィクトリア朝の詩人は、ときには非情な海や自然の暴力を讃え、海を神格化することもあった。一方、十九世紀のイギリスは大英帝国の最盛期で海運業や貿易が栄え、国内では鉄道の発達により海水浴が一般的になり始めた。こうした社会的背景も当時の人々の海や海洋生物への興味を掻き立てた。ロマン派の詩人、サミュエル・テイラー・コールリッジは「老水夫の歌」でおそろしい架空の海を描き、ジョージ・ゴードン・バイロンは『チャイルド・ハロルドの巡歴』で群青と濃紺色の海を讃えている。ヴィクトリア朝の詩人マシュー・アーノルドは「ドーバー海岸」で場所と心象と思索が混然一体となった印象的な海の風景を描き、桂冠詩人アルフレッド・テニスンには海の風景をうたったすばらしい詩がいくつかある。

カーソンがここで名を挙げているアルジャノン・チャールズ・スウィンバーン (Algernon Charles Swinburne, 1837-1909) は十九世紀後半に活躍したイギリスの詩人である。スウィンバーンは後期ロマン派の詩人とされ、韻律の美しい、物語性に富んだ詩を書いたことで知られている。彼は、イギリス西南部コーンウォール地方の海岸や北海の荒々しさに魅せられ、『ライオネスのトリストラム』(*Tristram of Lyonesse*, 1882年)では、巧みな韻律を駆使して海の様相を描写した。スウィンバーンの海への愛は自分の詩を海からの贈り物になぞらえていることに顕著に現れている。

4 Buell, Lawrence. *The Future of Environmental Criticism*, vii.

5 Carson, "New York Herald-Tribune Book and Author Luncheon Speech," *Lost Woods: The Discovered Writing of Rachel Carson*, p.77. 1954年春、女性ジャーナリスト協会「シータ・シグマ・ファイ」が開催した昼食会での講演でもカーソンは同様のことを述べている。

The sea gives her shells to the shingle
The earth gives her streams to the sea:
They are many, but my gift is single,
My verses, the firstfruits of me.

----- Swinburne, "Dedication of Poems and Ballads " (1865), ll.1-4.⁶

海はその貝殻を砂利浜に与え、
大地は流水を海に与える。
その恵みは豊かだが、私の贈り物は唯一つ、
私の詩歌、私の初穂なのだ。

一方、ジョン・メイスフィールド (John Masefield, 1878-1967) は二十世紀前半に活躍した詩人・作家で、青年時に船員として数年働いた。彼の詩の多くは船員であった経験から生み出された海への強い憧れを高らかに歌い上げたもので、1930年には栄誉ある桂冠詩人に選ばれた。カーソンはメイスフィールドの代表詩集 『海ソルト・ウォーターのバラッド』 (*Salt-Water Ballads*, 1902年)中の詩「海へのあこがれ *Sea-Fever*」を、「海のもつ永遠の魅惑と抗し難い呼び声」をもつものとして賞賛した⁷。

Sea-Fever

I must go down to the seas again, to the lonely sea and sky,
And all I ask is a tall ship and a star to steer her by,
And the wheel's kick and the wind's song and a white sail's shaking,
And a grey mist on the sea's face and a grey dawn breaking.

I must go down to the seas again, for the call of running tide
Is a wild call and a clear call that may not be denied;
And all I ask is a windy day with white clouds flying,
And the flung spray and the blown spume, and the sea-gulls crying.

I must go down to the seas again to the vagrant gypsy life,
To the gull's way and the whale's way where the wind's like a whetted knife;
And all I ask is a merry yarn from a laughing fellow-rover,
And quiet sleep and a sweet dream when the long trick's over.⁸

6 Swinburne, Algernon Charles. *Major Poems and Selected Prose*, p.146.

7 Brooks, *Rachel Carson: The Writer at Work*, p.8.

8 Masefield, John. *Poems*, pp.899~900. なお、邦訳は松浦暢編訳『英詩の歎び—青春、そして夢と追憶』中の「海へのあこがれ」を使用させて頂いた。

また 行かねばならない あの孤独の 海と空にむかって
あこがれは ただ 舷そそりたつ船と 導きの星
軋りなる舵輪の音 風のうた ゆれる白帆
それに 海面をはう灰色の霧 あけゆく灰色の黎明のみ。

また 海に行かねばならない 流れる潮の叫びは
抗いがたい野生の叫び あざやかな叫び。
あこがれは ただ 白雲に流れる 風吹く一日
吹きとぶ波しぶきに 水泡 カモメの啼声のみ。

また 海に行かねばならない あのさすらいの ジプシーの旅へ、
研ぎすましたナイフみたいに 風の吹く カモメとクジラの海洋に。
あこがれは ただ さすらいの友の陽気な話に
長い舵手の仕事のあとの 安眠に 甘美な眠りのみ。

メイスフィールドの「海へのあこがれ」は、内陸部の人間が、カモメの啼声が出て白帆がおどる、開放的ではではない海にあこがれる、海洋熱のあり方を示す詩である。各連冒頭で"I must go down to the seas again"というフレーズが繰り返され、海に行くことに対する「私」の心理的必然性を助動詞"must"が効果的に表現している。

スウィンバーンやメイスフィールドの主観的、情熱的な海の描写は、科学的事実に基づくレイチェル・カーソンの著作と正反対に見える部分もある。しかし、広い海原やその神秘に魅せられた詩人たちの海への憧憬が、カーソンの海への憧憬とまだ見ぬ世界への興味を掻き立てたに違いない。カーソンは詩や小説を通じて、海への関心を高めていったのだ⁹。

2. テニソンの「ロックスレー・ホール」と決意

カーソンは大学入学時の自己紹介をするための文で、好きな詩人として、ブラウニングとともにテニソンを挙げている¹⁰。ある嵐の夜、ペンシルヴェニア女子大学の学生寮で読んで、イギリスの詩人アルフレッド・テニソン(Alfred Lord Tennyson, 1809-92)の詩「ロックスレー・ホール」("Locksley Hall", 1834年)がカーソンの進路を決める一つの契機となったことはよく知られたエピソードである¹¹。カーソンは後年、このときの出来事を回想してこう語っている。「その詩の一節は、私の内側にあるなにかに語りかけ、進むべき道は海へとつながっている、そして私の運命は海と関係があると教えてくれたのです」¹²。

アルフレッド・テニソンはリンカンシャー州の牧師の家に生まれ、ケンブリッジ大学に進学。早くから詩作の才能を発揮し、1850年に桂冠詩人の栄誉を受けた、ヴィクトリア朝を代表する詩人である。テニソンは後年、イギリス南部のワイト島に移り住むほど海を愛好し、海の風景をうたったすばらしい詩がいくつかある¹³。海辺の悲恋の

9 カーソンが海や海の生物をテーマにした詩や小説や愛読したことについては Brooks, *Rachel Carson: The Writer at Work*, pp.7-9.を参照。

10 上遠恵子 『レイチェル・カーソンの世界へ』、101頁。

11 Brooks, *Rachel Carson: The Writer at Work*, pp.20-21. Linda Lear, *Rachel Carson: Witness for Nature*, pp.39-40. 上遠 『レイチェル・カーソンの世界へ』、111-12頁。

12 Carson, A letter to Dorothy Freeman dated Nov. 8, 1954, *Always, Rachel*, p.59.

13 テニソンは1853年にワイト島に移り住み、1868年まで家族とともにワイト島で暮らした。

物語詩『イノック・アーデン』(*Enoch Arden*, 1864年)では海が物語の背景として効果的に使われ、彼岸への旅立ちを歌う晩年の詩「砂州を越えて」("Crossing the Bar", 1889年)では大海が永遠の象徴となっている。親友アーサー・ハラムの死を詠嘆する「砕け、砕けよ、砕け散れ」("Break, break, break", 1842年)を例に挙げよう。

"Break, break, break"

Break, break, break,
On thy cold grey stones, O Sea!
And I would that my tongue would utter
The thoughts that arise in me.

O well for the fisherman's boy,
That he shouts with his sister at play!
O well for the sailor lad,
That he sings in his boat on the bay!

And the stately ships go on
To their haven under the hill;
But O for the touch of a vanished hand,
And the sound of a voice that is still!

Break, break, break,
At the foot of thy crags, O Sea!
But the tender grace of a day that is dead
Will never come back to me.¹⁴

砕け、砕けよ、砕け散れ、
おまえの冷たい灰色の岩に、おお海よ！
願わくは、わが胸に起こる想いのかずかずを
口で言い表すことができるものなら。

漁夫の少年にとって何と幸せなことか、
遊びながら妹と大声をあげることができるなんて！
船乗りの若者にとって何と幸せなことか、
湾に浮かべた小舟で歌をうたうことができるなんて！

14 Tennyson, Alfred. *Tennyson's Poetry*, p.79. なお、邦訳は西前美巳編『対訳 テニスン詩集—イギリス詩人選(5)』中の「砕け、砕けよ、砕け散れ」を使用させて頂いた。

立派な船が進んでゆくよ、
小山の麓の港に向かって。
ああ、だが、今は亡き友の手に再び触れ、
今は黙せる声の響きを耳にできるものなら！

砕け、砕けよ、砕け散れ、
おまえの岩山の足もとに、おお海よ！
だが、過ぎ去った日の、あのやさしい恩寵は
二度とけっしてこの身に戻ることはないだろう。

詩人が親友を悼む心情が海と海辺の風景に託されており、人々に膾炙した名詩である。

さて、レイチェル・カーソンに海との運命的な結びつきを感じさせた「ロックスレー・ホール」はテニスンが二十代のときに書かれ、自伝的要素が濃いとされる作品である¹⁵。詩の主人公である「私」の甘い青春の恋や春になって森羅万象が生き生きする様子が描かれる一方、失恋や強い嫉妬、人生に対する不平不満など青春の苦悩と懊悩も語られている。詩中の「私はこの海辺をさまよい歩き、崇高な青春の想いを、不思議な魔力をもつ科学なるもので育んだ」という一節からは、ヴィクトリア朝のめざましい諸科学の進歩にテニスンが期待していたことも窺える¹⁶。

詩の冒頭部分で、ロックスレー・ホールが風景のように描写されている。

'Tis the place, and all around it, as of old, the curlews call,
Dreary gleams about the moorland flying over Locksley Hall;

Locksley Hall, that in the distance overlooks the sandy tracts,
And the hollow ocean-ridges roaring into cataracts. (ll. 3-6)¹⁷

まさしくこの土地にこそ、この周辺にこそ、昔どおりにダイシャクシギが鳴いている
荒地に漂う侘しい微光が、今ロックスレー・ホールの上を飛んでゆく。

ロックスレー・ホールは はるか彼方に 砂地を見下ろし、
うつろに響く大海の大波は、しぶきとなって 轟きわたる。

詩に描かれた風景はテニスンの故郷、イングランド中部リンカンシャー州の海岸だと言われている。詩人の生まれた牧師館のあるサマズビーは丘陵部にあるが、詩人の豊かな想像力が卓越した風景描写を生み出した。では、カーソンに決断を促した「ロックスレー・ホール」の語句を考察しよう。

15 西前美巳『テニスンの言語芸術』（開文社出版、2000年）の第5章「ロックスレー・ホール」'Locksley Hall'
—自伝的要素の断章が奏でる青春譜—を参照した。

16 西前『テニスンの言語芸術』、107-08頁。

17 Tennyson, *Tennyson's Poetry*, pp.94~100.

Cramming all the blast before it, in its breast a thunderbolt.
Let it fall on Locksley Hall, with rain or hail, or fire or snow;
For the mighty wind arises, roaring seaward, and I go. (ll. 192-94)

雷を抱きて 激しく吹く風をのみ込み
雨 霰 炎も雪も ロックスレー・ホールに降らば降り
風が海へとうなりをあげて吹く 我 いざ漕ぎ出ださん

ここには前進しようとする理想主義的青年の強い意志が表明されている。詩の中の「私」がさまざまに逡巡した後、荒波に立ち向かって自分の道を進む決意を高らかに語るこれらの詩句が、文学の道を志すか生物学の道を歩むかで悩んでいたカーソンの心を捉え、「私の進むべき道は海だ」と決意させたのだと推測できよう。

カーソンは進むべき道を海へと決めてから、荒波や困難に立ち向かいながら海洋生物学を研究し、海の伝記作家と呼ばれるようになった。また、農業や化学物質の害について誰かが声を上げなければならないことを確信すると、カーソンは周囲の批判を受けることを恐れずに『沈黙の春』執筆に着手し、四年の歳月をかけて完成させた。

『沈黙の春』の最終章は「べつの道」と題されている。その冒頭でカーソンは、「私たちはいまや分かれ道にいる。ロバート・フロストの有名な詩とはちがって、どちらの道を選ぶべきかいまさら迷うまでもない。長いあいだ旅をしてきた道は、すばらしい高速道路で、すごいスピードに酔うこともできるが、私たちはだまされているのだ。その行きつく先は、禍いであり破滅だ。もう一つの道は、あまり〈人も行かない〉が、この分かれ道を行くときにこそ、私たちの住んでいるこの地球の安全を守れる、最後の、唯一のチャンスがあるといえよう。とにかく、どちらの道を選ぶべきか決めなければならないのは私たちなのだ」（強調は筆者）と、「人の行かない道」であっても正しい道を選択するべきであることを主張する¹⁸。カーソン自身、荒波が待ち受けていようと、自分の信念が貫ける道を選択していったのである。

3. 想像力と「センス・オブ・ワンダー」

カーソンは前述の新聞社主催の昼食会で、大学卒業後に研究員としてひと夏を過ごしたウッズホール海洋生物研究所に行くまで海を直接目にしたことはなく、「言うなれば、海に対する私の第一印象は感覚的、感情的なものであって、科学的な知識はあとからきたものなのです」とも語っている¹⁹。今まで見てきたように、カーソンがまだ見ぬ海に強い結びつきを感じていたのは、本を読むことにより大きくイマジネーションの翼をひろげ、海への興味を培っていたからである。カーソンは主に若い母親を対象にしたエッセイ『センス・オブ・ワンダー』で、子どもの時に五感で物事を受けとめる重要性について次のように述べる。

I sincerely believe that for the child, and for the parent seeking to guide him, it is not half so important to know as to feel. If facts are the seeds that later produce knowledge and wisdom, then the emotions and the impressions of the senses are the fertile soil in which the seeds must grow. The years of early childhood are the time to prepare the soil.²⁰

わたしは、子どもにとっても、どのようにして子どもを教育すべきか頭をなやませている親にとっても、「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要でないと固く信じています。子どもたちがであう事実のひとつひとつが、やがて知識や知恵を生みだす種子だとしたら、さまざまな情緒やゆたかな感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。幼い子ども時代は、この土壌を耕すときです。

18 Carson, *Silent Spring*, p.277.

19 Carson, "New York Herald-Tribune Book and Author Luncheon Speech," p.77.

20 Carson, *The Sense of Wonder*, p.56. なお邦訳は、上遠恵子訳『センス・オブ・ワンダー』を使用させて頂いた。

カーソン自身、子どものときに自然を観察した体験に加えて、読書により感性の世界を広げ、海に魅力を感じたことが、彼女の生涯を決定づけ、成長して海洋生物学を専攻させたと言えるだろう。カーソンは、海を愛した詩人たちと同様に豊かな想像力を持ち、その感性が科学的な海に関する作品の執筆に大きく貢献した。カーソンの言葉によれば、「海の生物とはどんなものかを感覚的につかむためには、活発に想像力を働かせ、しかも、しばらくは人間的なものの見方や基準を捨て去る必要がある」のである²¹。カーソンは、『われらをめぐる海』では、伝統的な海の象徴性を踏まえながら、島の生命地理学的汚染をテーマとして包含し、すべてのものの海への永遠の回帰で文章を終えている。『沈黙の春』では、殺虫剤が「死の川」を通して海洋を汚染し、海洋生物の死をもたらすことに批評家は驚かされた。カーソンの海への関心は生涯を貫くものだった。またカーソンは、『センス・オブ・ワンダー』の中で、「センス・オブ・ワンダー」の感性は生涯持続しうるものであることを雄弁に語っている。

結びに

レイチェル・カーソンの生涯と五つの著作は、感性や想像力を育む重要性和、感性に裏付けされた知識の大切さを伝えている。カーソンの場合、自然の中で過ごした体験から得た「センス・オブ・ワンダー」の感性と、海に関する詩・小説・ノンフィクションを通じて喚起された海への強い興味が、海洋生物学者としての広範な知識に結実した。さらに、『沈黙の春』の執筆を通して、社会の現実をも直視し、荒波に立ち向かう強い意志を持たなければならぬことも、カーソンは私たちに伝えているのにちがいない。

21 Brooks, *Rachel Carson: The Writer at Work*, p.36. Brooks, *Speaking for Nature*, p.278.

引用／参考文献

- Buell, Lawrence. *Writing for an Endangered World: Literature, Culture, and Environment in the U.S. and Beyond*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 2001.
- _____. *The Future of Environmental Criticism: Environmental Crisis and Literary Imagination*. Oxford: Blackwell, 2005.
- Brooks, Paul. *Rachel Carson: The Writer at Work*. 1972; San Francisco: Sierra Club Books, 1989 [ポール・ブルックス著、上遠恵子訳『レイチェル・カーソン』新装改訂版、新潮社、2004年].
- _____. *Speaking for Nature*. San Francisco: Sierra Club Books, 1980.
- Carson, Rachel. *Under the Sea Wind*. Boston and New York: Houghton Mifflin, 1941.
- _____. *The Sea Around Us*. Boston and New York: Houghton Mifflin, 1951.
- _____. *The Edge of the Sea*. Boston and New York: Houghton Mifflin, 1998.
- _____. *Silent Spring*. Boston and New York: Houghton Mifflin, 1994.
- _____. *The Sense of Wonder*. New York: Harper Collins Publishers, 1998 [レイチェル・カーソン著、上遠恵子訳『センス・オブ・ワンダー』、新潮社、1996年].
- Freeman, Dorothy. ed. *Always, Rachel: The Letters of Rachel Carson and Dorothy Freeman, 1952-1964*. Boston: Beacon Press, 1995.
- Lear, Linda. *Lost Woods: The Discovered Writing of Rachel Carson*. Boston: Beacon Press, 1998.
- _____. *Rachel Carson: Witness for Nature*. New York: Henry Holt and Company, 1997 [リンダ・リア著、上遠恵子訳『レイチェル——レイチェル・カーソン「沈黙の春」の生涯』、東京書籍、2002年].
- Masefield, John. *Poems*. London: Heinemann, 1946.
- Quaratiello, Arlene R. *Rachel Carson: A Biography*. Westport, CT: Greenwood, 2005.
- Swinburne, Algernon Charles. Jerome McGann and Charles L. Sligh eds. *Major Poems and Selected Prose*. New Haven: Yale University Press, 2004.
- Tennyson, Alfred. Robert W. Hill Jr. ed. *Tennyson's Poetry*. New York: Norton, 1971.
- W. H. オーデン、沢崎順之助訳 『怒れる海——ロマン主義の海の図像学』、南雲堂、1962年。
- 上遠恵子 『レイチェル・カーソンの世界へ』、かもがわ出版、2004年。
- マーガレット・ドラブル、奥原宇・丹羽隆子訳 『風景のイギリス文学』、研究社、1993年。
- 西前美巳 『テニスの言語芸術』、開文社、2000年。
- 『対訳 テニス詩集——イギリス詩人選(5)』 岩波文庫、2003年。
- 松浦暢 編訳 『英詩の歎び——青春、そして夢と追憶』、平凡社ライブラリー、2000年。

Abstract. Although Rachel Carson (1907-64) is now remembered largely for *Silent Spring* (1962), which exposed the dangers of pesticides, this book was preceded by three best-sellers about the ocean environment: *Under the Sea Wind* (1941), *The Sea Around Us* (1951), and *The Edge of the Sea* (1955).

Carson always had a great appreciation for the natural world. She spent a great deal of her childhood exploring the woods on her family's property and enjoyed watching birds, insects and flowers. Remarkably, it was the ocean that most strongly attracted Carson, even though she lived far away from the Atlantic coast and had never visited the ocean as a child. She also developed a love of books and read every book she could find about the ocean. Through reading poems of Swinburne, Masfield and other poets, Carson formed an attachment to the traditional romantic image of ocean as ultimate sanctuary. It was some lines from "Locksley Hall" by Alfred Lord Tennyson that convinced Carson of her destiny. Later in her life she wrote, "I can still remember my intense emotional response as that line spoke to something within me seeming to tell me that my path led to the sea—which then I had never seen—and that my own destiny was somehow linked with the sea".

Carson is a talented scientist and exceptional writer who kept her "Sense of Wonder" throughout her life. Carson's life and work tell us the importance of a vivid imagination and a strong will to go his/her chosen road.